



発行：オープンアクセスリポジトリ推進協会

jpcoar@nii.ac.jp

(報告) JPCOARワークショップ

「『OA+x=OS』～とにかくオープンアクセス・オープンサイエンス～」

(特集) 2019年度 JPCOAR作業部会インタビュー

(連載) オープンアクセス紀行

(報告) シンポジウム・ワークショップ「大学における研究データサービス」

(報告) リポジトリJAIRO Cloud移行ワークショップ (群馬)

JPCOARワークショップ参加レポート

「OA + x = OS」
～とにかくオープンアクセス・
オープンサイエンス～

2020年2月13日、国立大学図書館協会中国四国地区協会助成事業として岡山大学で開催されたJPCOARワークショップ「『OA+x=OS』～とにかくオープンアクセス・オープンサイエンス～」に参加しました。

第1部（とにかくオープンサイエンス）の基調講演「オープンサイエンスの潮流と図書館機能の重要性」では、OSの概要と政策的側面、現状と変革例、課題と展望および図書館が果たすべき機能などについて、「図書館員のためのオープンサイエンス」の講演では、OSという文化的変革において、図書館員も含め、研究、教育、知識交流コミュニティの各関係者が、活動上の生活習慣を変える必要があることなどについて話がありました。

第2部（とにかくオープンアクセス：グッドプラクティスと課題）では、各機関のグリーンOA進捗度の因果分析、OA推進の優れた取り組みを行っている大学の事例および新JAIRO Cloud (WEKO3) への移行評価実験について、課題も含めた報告がありました。

全体的な振り返りとして、第1部では、OSは始まったばかりで、現在は様々な試行錯誤が起こり得る段階である一方、OSにより既に様々な変革も起きていること、図書館サイドがそれらの変革に適応するに

は、柔軟かつ主体的、そして地道に変革に繋がる取り組みを始めることが不可欠であり、中でも研究者との積極的な関わりが最も重要であることなど、両講演とも共通する認識が見られ、今後OS関連の業務に接した場合、前述の共通認識などを意識して行動しようと心に留めました。

また、第2部では、第1部の講演で述べられた内容とリンクする報告がいくつか見受けられました。その具体例として、長崎大学附属図書館の事例報告（Scopusアラートを活用した論文収集・登録を継続した結果、海外のリポジトリランキングに上位登録されたこと）について、OA推進に向けて地道に取り組みを行ったことが高評価に繋がった好事例と言えることなどが挙げられます。

以上のように、本ワークショップは、相互の内容が密接に連動した「グッドワークショップ」であったと実感しました。

大野 和也

(愛媛大学図書館医学部情報サービスチーム)

* 発表資料などがWeb公開されている場合は、そのWebサイトへのリンクが付けられています。印刷物でご覧の方にはあらかじめご了承ください。

特集：2019年度 作業部会インタビュー

JPCOAR設立4年目となった2019年度は、体制を改め、運営委員会と4つの作業部会が主体となって具体的な取り組みを行いました。2019年度、各作業部会が行ってきた活動を主査へのインタビューにて振り返ります。

研究データ作業部会

話し手：結城 憲司（北海道大学）

Q.まずは、研究データ管理に関する国内の状況について教えてください。

研究データ管理計画（DMP）の提出を求める外部資金の対象は、日本国内でも広がりつつあり、今後もこの流れは変わらないと思います。そのサポートを誰がどう対応していくのが課題です。また、論文根拠データの公開を求めるジャーナルが増えつつあり、機関リポジトリはその受け皿となる可能性を秘めています。研究データ管理（RDM）への対応を考えると、機関リポジトリは研究データ等に対応した次世代のメタデータスキーマであるJPCOARスキーマへの対応が求められるでしょう。

Q.国内でもRDMの動きが活発になりつつありますね。では研究データ作業部会は今年度どのような活動をしているのでしょうか？

2019年度は3つのプロジェクトを実施しています。

まずデータベースレスキュープロジェクトは、科研費等の公的資金で作成されながら、存続の危機にあるDBを機関リポジトリ等で救済するプロジェクトで、機関リポジトリによるRDMの事例やノウハウ、問題点を共有することを目的としています。今年度は7つの大学・研究所で取り組み、現時点では、[「日本の経験を伝える」（アジア経済研究所）](#)と[「日本の雑草種子画像データベース」（岡山大学）](#)の2つのDBが機関リポジトリで公開されています（岡山大学はテスト公開）。その他、本プロジェクトによるものではないのですが、[「ピラネージ画像データベース」（東京大学）](#)、[「数学教室貴重書ライブラリ」（京都大学）](#)、[「北の息吹：日本の魅力的なワイルドフラワー500種」（北海道大学）](#)といったレスキュー事例が報告されています。今年度の活動成果を3月末までにまとめる予定です。

学認LMSによるRDM教材の試験運用プロジェクトでは、NIIで開発中の学習管理システム「学認LMS」において、JPCOARが作成した[RDM教材](#)（動画版・e Book版）の試験運用を実施しました。学認LMSと教材の両方の問題点を洗い出すとともに、各機関におけ

るRDMのきっかけとしていただくことが目的です。本プロジェクトでは22機関が9-12月の試験運用に参加し、12/18に報告会を開催しました。報告会では、教材については肯定的な意見が多かったのですが、学習に手間取る、内容が薄い等の否定的な意見も一部あり、今後の課題となります。

最後に若手研究者向けのRDM教材作成プロジェクトについて紹介します。JPCOARの既存のRDM教材は体系的に幅広く学べるように知識を詰め込んでおり、受講に時間が掛かり、忙しい研究者の受講を促しにくいという懸念がありました。そこで本プロジェクトでは、教材を内容ごとに分割し、ピンポイントで受講できるよう再構成を行うことを目的としています。教材のターゲットは、これからRDMを始める必要のある若手研究者とし、RDM教材の分割化で先行している千葉大学の教材を参考にしながら、JPCOAR版教材の再構成を進めています。今年度中に試行版を作成する予定です。

Q.研究データの実践に向けて多くの活動をされていますね。では、次年度はどのような活動を予定していますか。

データベースレスキュー、若手研究者向けの教材作成については、2020年度も引き続き実施し、会員館のお役に立てる成果を出していきたいと考えております。「学認LMS」は受講ログの分析機能を中心に開発が遅れているため、本運用は2020年度以降になる予定です。

また、2019年度は準備段階で、2020年度から本格的に開始するRDM事例形成プロジェクトというものがあります。大学ICT推進協議会 研究データマネジメント部会（AXIES-RDM部会）と協力プロジェクトで、2019年度は参加機関募集、2020年度・2021年度の2年間で事例を蓄積し、公開していくことを目的にしています。本部会では、研究データの公開など、図書館に関係の深い事例の取りまとめ等を担当します。

Q.最後に一言お願いします。

2019年度の作業部会メンバーは21名で、データベースレスキュー8名、学認LMSによるRDM教材の試験運用プロジェクト6名、若手研究者向けのRDM教材作成7名が参加しています。作業部会の全体会議は年3回開催しており、集合会議は1回、残り2回はTV会議でした。その他、プロジェクトごとにTV会議で情報共有しながら、それぞれの活動を進めてきました。

研究データやオープンサイエンスは、まだ先が見通せないことが多く、ここ数年でその方向性が見えてくるのではないかと感じております。そういう刺激的な課題に取り組める研究データ作業部会に是非多くの方に参加いただきたいと思います。

研究は多様であり、研究データも多様です。その多様なものを扱っていくには、様々な機関から参加いただき、いろいろな視点からご意見をいただくことが大事だと考えております。



コンテンツ流通促進作業部会

話し手：高橋 菜奈子（東京学芸大学）

Q.2019年度の活動概況をお聞かせください。

4つのチーム（JAIRO Cloudチーム・SCPJチーム・コンテンツ収集チーム・メタデータチーム）に分かれて活動しました。



Q.JAIRO Cloudチームの活動についてお聞かせください。

NIIから開発中の新JAIRO Cloud（WEKO3）について検証依頼があり、検証実験を実施しました。作業部会以外に他大学10機関にも参加してもらい検証実験を実施しました。

Q.実験を終えての所感等がありますか。

「重要な機能のうち動いていない部分を検証していく」という課題と「こうであつたらいいなという部分が実現できていない」という問題を切り分けて評価

することができたと感じています。必要不可欠な機能に不具合がないかという点に開発者は注力したいはずと考え、今回の実験で評価しました。「将来的にこういう風にしたいな」という希望は、継続課題として今後も積み上げていく形になりました。成果は、[図書館総合展のフォーラム（11/14）で発表](#)を行った他、[岡山大学で開催されたWS（2/13開催の「『OA + x = O S』～とにかくオープンアクセス・オープンサイエンス～」）での報告](#)、[新JAIRO Cloud（WEKO3）移行説明会（3/6）での報告](#)を行いました。[報告書](#)も公表予定です。

Q.SCPJチームの活動についてお聞かせください。

筑波大学が長年に渡り運用してきたSCPJが、サーバ老朽化のためサービス移行の必要があるということで、SCPJの移行に取り組んでいます。昨年からの検討を行い、[Googleスプレッドシートによるデータ提供](#)を行うことになりました。3月末には移行して情報提供をできる形にしていきたいと考えています。

Q.来年度の継続課題はありますか。

一番の課題は、データのメンテナンスをどう行っていくかということです。これはコンテンツ作業部会だけの問題ではなく、図書館界全体がコミュニティとしてしっかり考えていく必要があります。ぜひ全大学でこの問題をしっかりと考えていきたいと考えています。

Q.コンテンツ収集チームについてお聞かせください。

コンテンツ収集チームは二つの活動を実施しました。

一つはGreenOAの実態把握のためのインタビュー調査です。NIIの河合先生がIRDBのデータを用いて、各大学がどのようなコンテンツを登録しているかを数量的に分析をされており、その研究成果をベースに、今年度は数量的に現れない実際の活動を調査しました。これまで突出していると考えられていなかった大学の中にIRDBの数値が高い大学があり、伺ってみると、良い活動をされていることが判明しました。図書館総合展のフォーラム（11/14）で報告を行いました。

Q.メタデータチームについてお聞かせください。

昨年度までのメタデータ普及タスクフォースの活動を引き継いでいます。スキーマの維持、普及を重要課題として取り組んでいます。

今年度はスキーマの維持管理が活動の柱となり、スキーマ改定のサイクルについて議論しました。世界の動向に追随するためには、1年程のサイクルでガイドラインやスキーマを改定する必要があると考え、[今年度の改訂](#)を行いました。

Q.世界の動向を意識されたということですが、具体的にはどのようなことでしょうか。

特に、研究データに関する動向は世界を意識する必要があります。研究データのメタデータに関する話題がこれからメタデータを考えていく中で大きな部分を占めるようになると思います。

Q.次年度の計画についてお聞かせください。

新チームを作りたいと考えています。GreenOAを活発にしていくため、業務フローをどのように組み上げていくのが非常に重要になると考えています。データをうまく活用したよりよい業務フローが考慮されたシステムとは何かを考え、JAIRO Cloudのシステムにも反映されていくように活動したいと考えています。

コンテンツ流通促進作業部会は調査・分析活動からシステム開発のための実証実験まで幅広い活動を行っていますので、何か「やってみたい！」という熱意がある方にぜひご参加いただきたいです。それぞれの経験や得意分野を生かして積極的に物事に取り組んでいける方であればどんな方でも大歓迎です。

Q.CoCOAR読者に一言お願いします！

皆さんが協力してOAに取り組み、リポジトリを支えていくのがJPCOARの根本理念だと思いますので、自分ができること・やりたいことを「一緒にやろう！」と発信してほしいです。自館のリポジトリにコンテンツを1つ登録したとか、そういうちょっとした力を皆が出し合っていけたら良いと思います。それが「協会」というものかなと考えます。

Q.もう一つの活動についてお聞かせください。

Unpaywallのデータを使って、GreenOAの立ち位置や、世界・日本の動向を俯瞰的に捉えるために、京都大学の西岡先生を中心にデータ分析を行いました。[調査報告](#)はこれから発表予定ですが、大変興味深い数字が発表できると思いますので注目して待っていただきたいと思います。また、発表の機会として、大学図書館とNIIとの連携協力推進会議、海外での発表を予定しています。数量的に俯瞰しながら我々の向かうべき道筋を考えるということができました。

コミュニティ強化・支援作業部会

話し手：尾崎 文代（岡山大学）

Q. 最初になぜこのコミュニティ強化・支援作業部会ができたのかを教えてくださいか？

この作業部会の前身は「広報普及作業部会」という名前で、[ウェブサイト](#)や[Facebook](#)での情報発信を中心としたJPCOARの広報活動を行っていました。2019年に「[JPCOARオープンアクセスリポジトリ戦略2019~2021年度](#)」が策定され、その戦略の実現に向けてJPCOARの体制も変更され、現在のコミュニティ強化・支援作業部会（コミュニティ部会）になりました。この部会の主なミッションは戦略3「オープンアクセスリポジトリを支えるコミュニティとしての機能を強化する」です。

Q. コミュニティ部会はどのような活動をするのですか？

今までは広報活動が中心でしたが、それに加えて、従来JPCOARの作業部会がそれぞれ行っていたイベントを集約してコミュニティ部会が関わるようになりました。また、JAIRO Cloudを利用しているユーザーコミュニティに対する支援として、[掲示板](#)の運用や質問対応などを行っています。その他にも、参加機関でのグッドプラクティスを紹介・共有する活動もしています。今日のワークショップ（注：2020/2/13開催のワークショップ「『OA + x = OS』～とにかくオープンアクセス・オープンサイエンス～」）でもグッドプラクティスにつながるアンケート分析と[各機関の事例発表](#)をしてもらいました。

Q. なぜグッドプラクティスを紹介しようと思ったのですか？

JPCOARのオープンアクセスリポジトリ戦略の中で「会員機関が実施する優れた取り組みへの支援を行い、その成果を協会、会員機関へ還元する。」という活動計画があげられています。この計画でもあげられているように、会員機関のグッドプラクティスを共有することで、他の機関でのコンテンツ収集などの活動をサポートしたいと思ったからです。

Q. それでは今年度行った活動について教えてください。

JPCOARのオンライン情報誌である[CoCOAR](#)を3回発行しました。あと、[Facebook](#)や[Twitter](#)などのSN

S、ウェブサイトで継続的に情報を発信しています。イベント関係では、図書館総合展のフォーラムで活動報告や事例発表の企画・運営を行いました。そのほか、群馬県と岡山県でワークショップを開催しました。このようなイベント開催によりオープンアクセス、オープンサイエンスをさらに進めたいと思っています。また10月の[オープンアクセスウィーク](#)ではJPCOARのウェブサイトでも[各機関の取り組み](#)を紹介しました。

Q. 来年に行いたい活動や今後の抱負について教えてくださいか？

JAIRO Cloudユーザーへのサポートを充実させていきたいと思っています。来年度はJAIRO Cloudの移行があるので、これをスムーズに乗り越えたいです。そのためには、参加機関全体でコミュニティをサポートしていく体制を作り、お互いが情報共有できる相互扶助的な関係ができるしくみを作りたいです。そして、コミュニティを盛り上げるためにコミュニティ部会が頑張っていきたいと思います。また、イベントについても、可能であれば今年度と同じように図書館総合展でのフォーラムや地域ワークショップを開催したいと思っています。

Q. 最後に一言お願いします。

JPCOARは参加機関でつくるコミュニティであり、それを盛り上げるのがコミュニティ部会です。コミュニティ部会では来年度一緒に活動してくれる方を募集しています。日本でのオープンアクセス、オープンサイエンスを盛り上げたいと思っている方、ぜひ私たちと一緒に活動しましょう！



人材育成作業部会

話し手：杉田 茂樹（上越教育大学）

Q. まず、人材育成作業部会の2019年度の活動について教えてください。

機関リポジトリ新任担当者研修をNIIと武庫川女子大短期大学で実施しました。これまではJAIRO Cloudの操作説明会などもあり、NIIでないと実施の難しい面もあったのですが、内容をコンパクトにまとめたこともあり、関西地区でも開催することができました。西日本からの参加が昨年よりも15%程度増加し、より幅広い方に参加いただけました。



また、今後の人材育成の方向性を検討するために、[オープンアクセスリポジトリ連合 \(COAR\)](#) のコンピテンシー（職務や役割において優秀な成果を発揮する行動特性）リストとその解説論文の翻訳を行いました。以下の2文献を7-8人で、分担して翻訳を行いました。

[Librarians' Competencies Profile for Scholarly Communication and Open Access](#)

[Librarians' Competencies Profile for Research Data Management](#)

この翻訳した成果物については、JPCOARのWebサイトで公開します。

Q. コンピテンシーリストの翻訳を行った目的はなんですか？

[JPCOARの戦略](#)「4.1 オープンアクセス、オープンサイエンスの推進に対応できる人材に必要な標準的な技能や知識を明確にする。」に沿った活動です。翻訳したものを分析した結果、2020年度以降の研修計画を行いました。

Q. 分析を通して、印象に残っている点はなんですか？

機関リポジトリと限定したものではなく、広く学術コミュニケーション全般に対応した人材が必要ということと、COARのリストそのものは万国共通で活用出来るものとして作られています、やはり日本特有の事情に合わせて換骨奪胎していく必要があるということです。例えば、科研費番号やJ-Stageのようなプラットフォームについてです。

Q. ありがとうございます。それでは、これらの分析を踏まえた次年度の計画について教えてください。

機関リポジトリ新任担当者研修を、オープンアクセス新任担当者研修にリニューアルします。オープンアクセス出版や研究データ管理、オープンサイエンスの動向も交えて、学術コミュニケーションをある程度俯瞰するような内容を盛り込みます。6月に法政大学、9月に武庫川女子大学の協力のもと実施します。

その他、学術コミュニケーションにおける要素技術、例えばOAI-PMHやDOIなど各種識別子、を概観するようなセミナーや研究者を交えた実践的な研究データ管理のワークショップも実現に向けて企画しています。

Q. JAIRO Cloudについての研修などは予定されていますか？

新JAIRO Cloud (WEKO3) がリリースされますので、その操作説明会を全国の複数箇所で開催する予定です。実施時期は2020年度冬頃を予定しています。会場などは未定です。

Q. 最後にどのような方に人材育成作業部会に加わって欲しいと考えていますか？

各地で説明会やワークショップを予定しています。（学内調整してもいいから）自分の所属機関でイベント実施したいという方、是非一緒に企画しましょう。



オープンアクセス 論文紀行

J P C O A R
オープンアクセスリポジトリ推進協会

Vol.6 オリンピック・スポーツ

国内の大学や研究機関、助成機関では、様々な調査研究の文献を「機関リポジトリ」等のウェブサイトで公開しています。その中から毎回テーマを決めて、専門家の方以外にも親しみやすい日本語文献を紹介します！ CiNii Articles であなたも楽しそうな文献を見つけてみませんか？

消費空間としての**スポーツスタジアム**の再編：「ファンタジーシティ」論を手がかりとして（北海道大学）

大学野球選手のスイング速度と体力要素の関係：スクワット・ベンチプレス1RMとスイング速度の相関関係（仙台大学）

競泳リレー種目の様々な引き継ぎ方法に関する事例研究（新潟医療福祉大学）

ゴルフ練習場に通うゴルフスクール生の実態調査（三重大学）

1964年**東京オリンピック**選手団公式服装の服飾史的位置をめぐる研究：アイビーブームとの関係を中心に（大阪大学）

多様な環境での快適強度の**ランニング**が運動効果に及ぼす影響について（鳥取大学）

選択授業における**バラスポーツ**の導入実践に向けて（広島大学）

サッカーゲームにおける得点傾向の分析（第二報）（尾道市立大学）

「道」の行方と学校体育：**武道**で何を教えるのか（福岡教育大学）

長野冬季オリンピックの開催に伴う地域変容：長野県および白馬村の事例を中心として（熊本大学）

大学**運動選手**の恋愛経験が**競技生活**に及ぼす影響（神戸大学）

復刻版**木製ヤリ**における振動特性とたわみ剛性に関する研究（神戸大学）

漸増歩行速度条件で保持される**競歩**の上肢と下肢の協応パターンの安定性（南山大学）

戦前期立教大学**野球部**の活動と組織（立教大学）

スポーツの政治的利用：**ベルリンオリンピック**を中心として（慶應義塾大学）

オリンピックの通訳について－文献考察とインタビュー調査より－（国際基督教大学）

分岐鎖アミノ酸含有飲料の摂取が**大学野球投手の投球パフォーマンス**に与える効果（北海道大学）

発達障害者を対象とした**タグラグビー**におけるプレー動作の様相：アクシデント及びインシデント場面に着目して（岩手大学）

スポーツマーケティング研究の多様化に関する考察（会津大学短期大学部）

柔道選手における腕パワーの持続性と有酸素能力との関連（千葉県体育学会）

十種競技選手の等速性筋力（千葉県体育学会）

大学**女子バレーボール選手**における競技前後の状態不安について（千葉県体育学会）

相撲競技における体格と勝敗および勝負時間との関連（千葉県体育学会）

高温環境下における**バスケットボール**授業時の体重減少と心拍数の変動について（千葉県体育学会）

高校**体操競技**選手の“あがり”について：技術水準に差異のある集団間の比較（千葉県体育学会）

重度身体障害を有する**電動車椅子サッカー**競技者が体験している困難と競技に取り組む意義（千葉大学）

ラグビーワールドカップを非英語圏で開催するという：開催都市の受け入れ環境を考える（千葉大学）

合気道史における海軍大将竹下勇の覚書『乾』、『坤』（1930-1931年）の研究（早稲田大学）

明治期沖縄県における「報道」から見る**空手**の諸相：『琉球新報』の分析を中心に（法政大学）



ご紹介している文献は、CiNii Articles (<https://ci.nii.ac.jp/>) から検索し、各大学のウェブサイト（機関リポジトリ）等で全文を閲覧可能です。

CiNii
日本の論文をさがす

論文検索	論文検索	論文検索
フリーワード	フリーワード	フリーワード
すべて	本文あり	検索

報告：イリノイ大学に学ぶ「研究データサービス」

2019年12月5日、6日に九州大学中央図書館で開催された、九州大学統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻・附属図書館共同開催イベント シンポジウム・ワークショップ「大学における研究データサービス」に参加しました。5日に開催されたシンポジウムは研究データに関する座学、6日に開催されたワークショップはシンポジウムの内容をより深く理解するためのグループ演習形式で開催されました。今回は催しの概要紹介とワークショップの様子を中心にご報告したいと思います。



両日ともに講師として研究データサービスを実施しているイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校(以下、イリノイ大学)の図書館員3名(Heidi Imker氏, William H. Mischo氏, Mary C. Schlembach氏)が登場しました。シンポジウムは、研究データサービスを開始した経緯、研究者への研究データ支援事例の紹介が行われました。講演後のパネルディスカッションでは、日本の大学図書館が研究データサービスに今後どう取り組むべきか議論が行われました。翌日のワークショップは、研究データの概要について振り返り、実際にイリノイ大学で行われている研究データサービスを基に、学術雑誌論文のデータ特定、データキュレーション、データポリシーの確認に関する演習が行われました。研究データサービスの実務を意識しつつ、他の参加者と研究データへの疑問・課題を共有し合い理解を深める場となりました。

具体的にワークショップで挙げられた疑問の一例をご紹介します。「学術雑誌論文のデータ特定」の演習で、用意された論文の図や表を見て「underlying data」を特定する課題が与えられました。underlying dataは分析を行うための基礎となるデータを示しています。一方で、データ分析のための加工などが施されていないデータは「raw data」と

と呼ばれています。演習で使用された論文は、複数のWebサイトの内容について分析・集計を行った図表が掲載されていました。そこで、この情報の元となったWebサイト自体をraw dataとして扱うべきか、との疑問が参加者から投げかけられました。この点について、講師陣も「raw dataではなく、あくまでソースデータのため、研究データ管理の対象とならない」といった意見や「データ再利用の観点から、Webサイトのスクリーンショットを保存しておくことが理想的」との異なる意見が出たため、研究データを適切に扱うことの難しさを実感しました。

上記のように、研究データへの対応方法について各大学の担当者だけでは判断が難しい事例がしばしば見られるようです。このことについて、解決につながる取り組みも紹介されました。イリノイ大学は「データキュレーションネットワーク」という大学の枠を超えた情報共有ネットワークに加盟しています。この組織は、特定の分野に詳しいキュレーターが他大学の研究データキュレーションに協力し、手法の共有を行っています。活動を通して、研究データ管理の標準化を行えることも利点となっています。

日本の大学図書館も「大学の枠を超えた協力」によって、研究データサービスが普及していくことを願っています。

シンポジウム・ワークショップ「大学における研究データサービス」 / 九州大学学術情報リポジトリ

<http://hdl.handle.net/2324/2547228>

[講演動画]

Talk: Overview of the Research Data Service at the University of Illinois - Dr. Heidi Imker

<https://youtu.be/1PM0iZ1bjgU>

Talk: Data Management Support for Researchers in Practice - Mary C. Schlembach and William H. Mischo

<https://youtu.be/MDunD0PLqV0>

泉 愛

(九州大学附属図書館eリソース課リポジトリ係・コンテンツ流通促進作業部会)

報告：リポジトリJAIRO Cloud移行ワークショップ（群馬）を開催しました

群馬大学のリポジトリは、2006年に学術情報リポジトリ（GAIR）として誕生し、その後、2012年から県内大学等も参加する「[群馬県地域共同リポジトリAKAGI](#)（以下、「AKAGI」）」として発展してきました。現在は20機関が参加し、登録コンテンツ件数は10,672件（2020年1月末現在）となっています。

今年度本学では、オープンサイエンスを推進するため、リポジトリシステムを現行のDSpaceからJAIRO Cloudへ移行すること及びAKAGIを2021年度末に終了することが決まりました。そのためAKAGI参加機関も、今後は独自にリポジトリを構築する必要があります。これまで共同リポジトリ環境を提供してきた本学としては、何らかの形で各機関を支援することが必要だと考えていました。

そこで参考となったのが、[CoCOAR No.6（2018年12月発行）](#)に掲載された「[地域共同リポジトリJAIRO Cloud移行ワークショップ（新潟）](#)」の記事でした。群馬県内ほとんどの大学図書館は職員が少ないため、県外の研修に参加することは容易ではありません。同様のワークショップをぜひ群馬でも開催したいとJPCOAR事務局へご相談し、2020年1月30日（木）、群馬県図書館大会（主催：群馬県図書館協会、会場：群馬県立図書館）の第2分科会として開催することになりました。

今回のワークショップは、JAIRO Cloudへ移行予定の機関を対象に、リポジトリの最新動向と移行作業について各機関のリポジトリ担当者と共に学び情報共有することで、不安を軽減しスムーズな移行作業につなげることを目的として企画しました。講師には、JPCOAR人材育成作業部会から安達修介氏（横浜国立大学）、下城陽介氏（上越教育大学）の二人を迎え、安達氏にはリポジトリを取り巻く最新動向についての講演、下城氏には現行JAIRO Cloudへの移行作業デモを実施いただきました。



[安達氏の講演](#)では、オープンサイエンスの理念の背景に、研究データのオープン化が求められていること、図書館には研究データの管理・公開・流通促進の役割が期待されていること、これらに対応するための次期JAIRO Cloudの機能や環境などが紹介されました。



続いて[下城氏による移行作業デモ](#)では、具体的な移行手順の説明、マッピング表の作成、フィルタ設定、そして一括登録までの実演が行われました。共同リポジトリでは抽出される各大学のメタデータ構造はほぼ同じものであるため、マッピング表などは本学で作成したものを流用できる、ということもアドバイスいただき、各大学の担当者は少し安堵されたようです。

参加者からは、「マニュアルを読むだけでは分からないイメージをつかむことができた」、「具体的な話を分かりやすく説明していただき、不安が少し軽くなった」などの感想が寄せられ、大変有意義な時間となりました。参加者は運営スタッフ含め32名（うち大学図書館は9機関16名）でした。移行作業は初めてで不安も大きいのですが、先にJAIRO Cloudを運用されている大学やこれから作業を始める担当者らと情報交換しながら進めていきたいと思います。

講師の安達氏、下城氏をはじめ、ワークショップ開催に向けて相談に乗っていただいた杉田茂樹氏（上越教育大学）ほかJPCOARの皆様にも心から感謝申し上げます。また、今後も引き続きお力添えいただければ幸いです。

山内 可菜（群馬大学総合情報メディアセンター）

【編集後記】

ついにCoCOARも10号に到達しました。今後もJPCOARの取り組みや各地のオープンアクセス・オープンサイエンスに対する取り組みを伝える一助となれるよう頑張りたいと思います。（大谷）

今年度の締めくくりとなる第10号はいかがでしたか。こんな記事が読みたい！というご要望もお待ちしています。（星野）

JPCOARの作業部会が何をやっているのかは私も今回の特集で初めて知りました。これらの活動に興味がある方はぜひご一報を。（上田）

Webサイト <https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>
Facebook <https://www.facebook.com/jpcoar/>
Twitter <https://twitter.com/jpcoar>



JPCOAR Newsletter: CoCOAR 第10号

2020年3月31日 発行

オープンアクセスリポジトリ推進協会

